

# 国際政治学のリアリズム

## 目次

1. リアリズムとは
2. ペロポネソス戦争
3. トゥキュディデス
4. 中世イタリア
5. ニッコロ・マキャヴェッリ
6. トマス・ホッブス
7. 戦間期
8. マックス・ヴェーバー
9. E.H.カー
10. 冷戦期
11. ハンス・J・モーゲンソー

## 0. はじめに

国際政治学における主要な分野の1つ。他にリベラリズム、マルキシズム、コントラクティズムなどがある。

今回は、リアリズムの中でもトゥキュディデスからモーゲンソーまでの伝統的リアリズムを見ていきたいと思う。

## 1. リアリズム(realism)とは

リアリズムは、主にヨーロッパの国際関係における経験に基づいて発展してきた国際政治に対する見方であり、次のことを基本的な内容とする。

第一に、主権国家が主要なもしくは最も重要なアクター(actor)である。国家そして国家間の関係に焦点を当てる

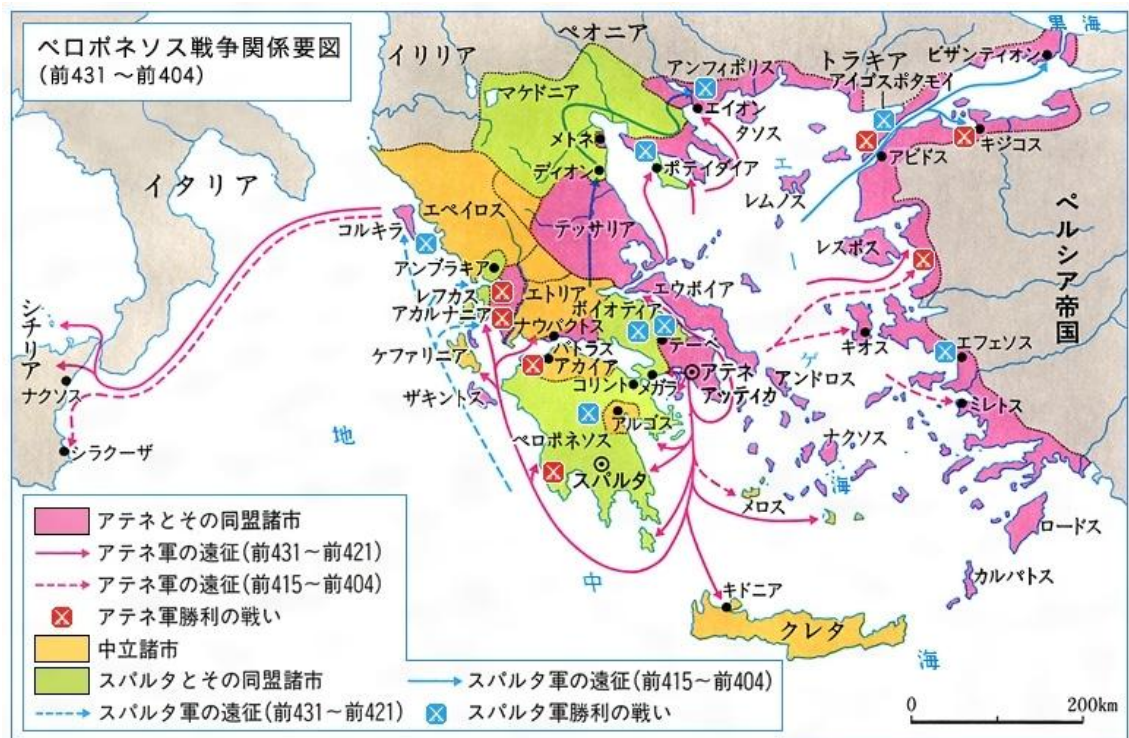
第二に、主権国家というものは己の外交政策に於いて国益を求めらる。

第三に、主権国家は国益を実現するための手段として国力を行使する。

また、リアリズムは、国際問題の最重要課題を国家安全保障だと考える。政治をハイポリティクス(high politics)、経済をローポリティクス(low politics)とみなす。国々の上に立つ権力が居ないため、国際政治は常にアナーキー。

## 2. ペロポネソス戦争

(B.C. 431 ~ B.C. 404)



### 〈直接の原因〉

アテナイとコリントスが、コリントスの植民都市ケルキュラとポテイダイアの両市をめぐる対立して、事実上両国が交戦状態に入った二つの事件。

### 各同盟内の権力

デロス同盟：民主政のアテナイが同盟諸国を不平等に扱い、過酷な貢納を要求

ペロポネソス同盟：寡頭制のスパルタは同じ政体を持つ同盟諸国を対等に扱われた。

どちらも秩序をもたらしていたものは上下関係を伴う支配原理。

## 3. トウキュディデス Thucydides

「アテナイの権力の伸長と、その伸長がスパルタに抱かせた恐怖こそが戦争を不可避にしたのである」

アテナイは利益を選び、道義を棄てた。人間の悲劇性を訴える。

## 4. 中世イタリア

### ◆イタリア戦争(Italian Wars) 1494~1559

1494年、フランス王シャルル8世がナポリの王位継承権を主張してイタリアに遠征したのが契機。フランスのバロア家とドイツ、

イスパニアのハプスブルク家の対立を軸とした戦争。ローマの劫掠(1527; Sacco di Roma)をはじめ諸国軍のイタリア侵攻はルネサンス文化を荒廃させた。

## 5. ニッコロ・マキャヴェッリ

(Niccolò Machiavelli/フィレンツェ/)

国家の存続が第一のテーマ。ここでの国家は君主と同一。

国家の道義と通常の人間の道義が別であるということを解明。

『君主論』で、君主の統治術の他、君主が有徳に見せかけるにはどうすればよいかを提示。

『君主が、慈悲、信義、誠実、人間性、敬虔に反することをすることを余儀なくされたとしても、国家を維持するためならば、彼は個々の人間にとって善とみなされる事柄をすべて遵守する必要はないのである』

## 6. トマス・ホッブス

( Thomas Hobbes/イングランド/)

人間は本来平等である。自然は総合的に見れば能力が平等な人間をつくる。故に目的達成に際しての希望の平等が生じる(→能力が同じだから相手と同じ希望をもつ事が可能)。

同時に享受できない者であれば、敵となり、お互い相手を減ぼすか、屈服させるかする。相互不信から戦争が起こる

・人間の本性：競争・不信・自負

競争は獲物を得るため、不信は安全を得るため、自負は名声を得るため、いずれも侵略を行わらせる

・「万人に対する万人の闘争状態」

闘争状態だと様々な不便が起こる。

勤労で得られる成果が不確定なために、土地の耕作、航海も行われず、海路輸入される物資の利用、便利な建物、多くの力を必要とするようなものを運搬し移動する道具、地表面に関する知識、時間の計算、技術、文字、社会のいずれもない。

その代わり、たえざる恐怖と、暴力による死がある。そこでの人間の生活は貧しく、汚らしく、残忍で、しかも短い。

また、闘争状態では、共通の権力が存在しないため、不正がない。

人々に平和を志向させる情念は、死の恐怖、快適な生活に必要なものを求める意欲、勤勞によってそれらを獲得する希望。

・自然権(ユス・ナトゥラレ)

各人が自分自身の生命を維持するため、自分の力を自分の欲するように用いるように持つ自由。

・自由(リバティ)：外的な障害が存在しないこと。

・自然法(レクス・ナトゥラリス)：理性によって発見された戒律。

権利の譲渡・放棄を行った人間は、その権利を譲渡・放棄した相手に対して、相手の権利を妨害することが許されないように義務づけられ、または拘束される。そして、彼は彼自身の行為を無効にしてはならないし、それは彼の義務で

ある。

・コモンウェルス

1個の人格であり、その行為は、多くの人々の相互契約により、彼らの平和と共同防衛のためにすべての人の強さと手段を彼が適当に用いることができるように、彼ら各人をその(行為の)本人とすることである。

## 7. 戦間期(1918~1939.8.31)

## 8. マックス・ヴェーバー

(ワイマール)

- ▶ **国家**とは、ある一定の領域の内部で正当な物理的暴力行使の独占を要求する人間共同体である。
- ▶ **政治**とは、権力の分け前にあずかり、権力の配分関係に影響を与えようとする努力である
- ▶ **支配の方法**は、実際の暴力の行使と威嚇
- ▶ 支配の正当性を3つの純粹型に分類  
「伝統的支配」「カリスマ的支配」「合法的支配」
- ▶ 現在の官僚政治を阻止できるのはカリスマ的支配
- ▶ カリスマ的指導者を誕生させるため、人民投票による指導者民主制が最適
- ▶ これを担保する安全弁として大統領

## 9. E.H.カー

(Edward Hallett Carr / イギリス /)

カーのリアリズムの特徴は何と云っても、理想と現実を対比して描写するところにあるだろう。どちらに極端に偏ることを嫌い、理想と現実の妥協を図ろうとする。

カーの考える権力。それは、3つの要素から成る。

軍事力、経済力、意見を支配する力の3点である。

## 10. 冷戦期

ファシズムを打倒した共産圏と資本主義圏が対立。

## 11. ハンス・J・モーゲンソー

(Hans Joachim Morgenthau / ドイツ→アメリカ /)

*『総ての政治と同様に、国際政治は権力の闘争である。国際政治の最終目標が何であれ、当面の目標は常に権力である』*

・国力

地理：最も安定した要素。領土の規模は核の出現で重要性さらに高まる。

天然資源：食糧と原料。比較的安定。



工業力：原料があっても、これがないと大国になれない。

軍備：科学技術とリーダーシップ、軍隊の量と質

人口：分布・動向

国民性、国民の士気、外交の質、政府の質

・勢力均衡(バランス・オブ・パワー)

### 不確実性

領土拡張が国の力に繋がらないことがあるように国力の諸要素—特に、国民性、国民の士気、政府の質は最も重要である—は捉えにくい。力の計算の不確実性は同盟から成るときには、限りなく増大する。

### 非現実性

不確実性が存在するため、ある国が国際舞台に於いて講じた措置をバランス・オブ・パワーの維持または回復に奉仕するものと正当化するときを使う。現状維持国の現状と同義語になり、如何なる力の配分とも同義語になる。実際の国際政治を偽り合理化し正当化しようとする。

### 不十分性

ヨーロッパは一つの共和国と捉えられる。ヨーロッパでは多数のライヴァルの競争によって、知識と産業の促進がされた。ヨーロッパ諸国は、秩序と自由を維持するために共通利益を通じて一体になる。ヨーロッパの道義的コンセンサスが帝国主義を抑えた。バランス・オブ・パワーが果たすと期待される役割と評価は、このコンセンサスの構成要素の検討にかかっている。

## 12. 参考文献

▶ 『戦史』

トゥキュディデス/訳：久保正彰/中公クラシックス/2013年

▶ 『君主論』

マキアヴェッリ/訳：佐々木毅/講談社学術文庫/2004年

- ▶ 『リヴァイアサン I・II』

ホッブス/訳：永井道雄・上田邦義/中公クラシックス/2009

年

- ▶ 『職業としての政治』

マックス・ヴェーバー/訳：脇圭平/岩波文庫/1980年

- ▶ 『危機の20年』

E・H・カー/訳：原彬久/岩波文庫/2011年

- ▶ 『国際政治—権力と平和(上)(中)(下)』

ハンス・モーゲンソー/訳：原彬久/岩波文庫/2013年

- ▶ 『現実主義の国際政治思想』

M・J・スミス/訳：押村嵩他/垣内出版株式会社/1997年

- ▶ 『国際政治経済学・入門第3版 野林健他/有斐閣アルマ/

2007年